

ケアとしてのパフォーマンス

殿塚 碧（國學院大学大学院）

近年、欧米諸国の美術館を中心に、「展示空間におけるパフォーマンス」に関する動きが活発になっている。我が国においても、欧米ほど活発とは言えないものの、例えば 2020 年に横浜美術館でタウス・マハチェヴァが行った《目標の定量的無限性》や、2021 年に東京大学博物館で行われたリー・ミンウェイによる《私たちのラビリンス》などといった展示室におけるパフォーマンスが注目され、着実に勢いを増している。その様子は、これまで「モノ」のための空間であった美術館に、新たな動きが出てきている、またパフォーマンスの側にも新しい流れができていく証左となっているであろう。こうした現代的な状況の中で改めてパフォーマンスを分析していくことは、パフォーマンスの新たな可能性を考えていく上で重要である。

英米圏のミュージアムで行われてきた展示空間でのパフォーマンスについては、クレア・ビショップが様々な分析を行なっている。その中でも、芸術家が専門家でも芸術家でもない人々を起用するパフォーマンスについて「委任されたパフォーマンス」という視座から分析した議論は非常に重要な指摘である。ビショップはその例としてサンティアゴ・シエラの作品などを挙げており、そういったシエラの搾取的とも言え、鑑賞者に居心地の悪さや不快感を生む作品を評価している。ビショップが評価するこの種のパフォーマンスは、確かにその不快感、居心地の悪さゆえに、見るものに訴える力、気づかせ思考させる力を持っているのは明らかである。しかしながら気づかせ思考させたその先が重要ではなかろうか。そしてそれを可能にするのは「ケア」ではなかろうか。この「ケア」を展示空間におけるパフォーマンスの議論に導入するため、本発表ではジェームス・トンプソンが主張するケアの美学という概念に注目する。ケアという観点からアート、特にパフォーマンスを検討するトンプソンはケアの中には芸術的な質があり、またアート、特にパフォーマンスや応用演劇といったアートの中にもケアの要素を見出すことができると主張する。

本発表では、このような芸術とは異なる領域であるケアの観点から、クレア・ビショップが展開する展示空間におけるパフォーマンスに関する議論を検討していくことで、パフォーマンスの拡張性と新たな可能性を提示していく。

主要参考文献

Amanda Stuart Fisher, James Thompson-“Performing Care : New Perspectives on Socially Engaged Performance”, Manchester University Press, 2020

クレア・ビショップ-『人工地獄－現代アートと観客の政治学』、大森俊克訳、フィルムアート社、2016 年

----「敵対と関係性の美学」、星野太訳、『表象 5』、月曜社、2011 年、75～113 頁